

現代風俗学研究

第4号・1998

BULLETIN OF SOCIETY
FOR CHANGING CUSTOMS
IN CONTEMPORARY JAPAN 4

経済と風俗

特集論文

- サイバースペースにおける経済的風俗をめぐる断章…………… 赤尾 晃一 1
- 経済を超えて——「焚き火から山火事」プロジェクト…………… 橋本 敏子 6
- ビジネスマンの生活と認知——東京とミラノを比較して…………… 岡林みどり 10
-
- 地域イベントのゆくえ：高知「よさこい祭り」…………… 内田 忠賢 21
- 暗号化された匿名の人間関係
——少女たちの「ステルス戦略」としての「バル友」…………… 藤本 憲一 27
- 家計簿と風俗——墨→鉛筆→万年筆→パソコンへ…………… 久米 礼子 33
- 現代風俗としてのビジネスマン…………… 常見 耕平 45
- 要不要の循環——フリーマーケットの都市風俗誌…………… 小林多寿子 58

特別寄稿

- 忍耐の限度に達したアメリカ人民によるマスメディアへの独立宣言
…………… 起草者：ステュアート・ユーウェン，翻訳：中江 桂子 71

一般論文

- 映画観客の「笑い」について…………… 長谷 正人 76
- 「青春歌謡」再考——昭和30年代の青春像…………… 市川 孝一 79

ビジネスマンの生活と認知

—東京とミラノを比較して—

岡 林 み どり

1. はじめに

バブルがはじけた90年代初め、80年代元気になった女性のあとを受けて男性が大きく変るのが90年代ではないかと考えて、ジャパン・プラス・イタリア社代表の大島悦子さんと共同で東京とミラノのビジネスマンの比較調査を企画しました。その結果を「ミラノー東京 ビジネスマン60名のライフスタイル比較調査報告書」として1995年12月にポーラ文化研究所から発行しました。

ここではその中から主な結果を報告し、ついでその後日本とヨーロッパに横たわる本質的な違いについて二年間考えてきたことを、主として認知の概念からまとめてみます。

2. ビジネスマン60名のライフスタイル比較調査報告より

1) 比較調査の背景と目的

これまで東京の男性は仕事を生活の第一の目的とし、仕事に多大の時間とエネルギーをさく生活を送ってきた。それを支えたのは「男は仕事、女は家庭」といういわゆる「性役割分担意識」と真面目に働く全ての企業人はむくいられるという「経済成長楽観主義」の二つであった。だが主婦の社会参加と低成長経済が、男性を企業にひきつけてきた年功序列と終身雇用を終焉させ、男性は企業に安住の場を見いだせなくなっている。その男性の関心と行動が今後どこへ向かうのか、あるいはどのような課題が生じていくのが、調査の目的である。

2) 基本姿勢と視点

インタビュー対象者の年齢層としては日本の団塊世代にあたる戦後生れの「ベビーブーマー」の世代、すなわち現在社会の中核をなしている40歳代後半の世代と、それより14、5歳若い、30歳代前半層を対象とした。サンプル数は各都市30事例と多くはないが、30の夫婦、30の家族についてのライフヒストリーや生活の各エリアの現実の姿・考え方を掘り下げてたずねることに加えて、生活のシーンやさりげない言葉の端々を聞き取り記録に残した。調査結果のまとめ方としては生活の姿をできるだけ具体的に伝えること、分析しすぎず、なまの声、事例を多くもりこみ、顔のみえるレポートにするようにつとめた。そのため、30名全員のプロフィールを作った。その抜粋が表1である。

●イタリアをみる視点

イタリアは、私たちが江戸時代からふれてきたオランダ、イギリス、ドイツとは違う文化と富の蓄積された国である。ローマ帝国を作り上げた古い歴史の国。ルネッサンスという時代を画する事で二度世界の富の頂点に立った国。プロテスタントを必要としなかった国。(カトリックであるという事は抗議すべき他者を必ずしも必要としない文化であり続けたということなのではないか?)

そこから明治以来の「私たちに对しての西欧」というものを相対化する一つの手掛かりを得られるのではないかと考えた。

この国は第二次大戦の敗戦国として日本と同じようなアメリカナイズの洗礼を受けた国でもあった。私たちがかかえるボーダレス化の課題を内包している国でもある。多くの移民をアメリカに送るほどの困窮層をかつてもっていた国でもある。ヨーロッパの中ではいち早くアメリカのいい面はいい面として積極的に受け入れてきたという点でも日本と似ている。このような点から、戦後の私たちを相対化する手がかりとなるものを探したいと考

表1 ミラノでのインタビュー対象者(抜粋)

ヘッドハンティング会社 共同経営(47歳) ミラノ出身。大卒(法学部) 年収(1億8千万リラ)
結婚20年。妻(44歳):専業主婦(元教師) 長男(18歳)、次男(12歳) 持家

大手メーカーで9年、多国籍企業で6年間働いた。38歳の時、会社の経営変動を機に転職か独立かと考えた後、独立。タイミングがよかったことは確かだ。自分の会社となると沢山の主人につかえる召使のようなもので、24時間中働かなければならない。土曜や日曜にも仕事の準備をすることもあるが、働くことには満足している。妻とは学生時代、山のハイキングでしりあい、結婚する前に6年間一緒に暮らした。妻は優しい性格なので、子供に対しては、私が「ノー」を言う役割を担っているが子供たちから信頼感を得ていると思っている。

電話会社 回線担当(48歳) 南部出身。商業高校卒 年収(4千万リラ)
結婚8年。妻(年齢不詳)専業主婦(職歴なし) 長女(7歳)、長男(5歳) 持家

電話会社のこの仕事について、22年になる。常に技術系の仕事で、電話線の接合に関するプロジェクトを最初から最後の調整まで担当している。現在、昇進を待っているところだ。会社のリストラに伴い、テレコミュニケーションの新しい会社が設立されることになり、昇進が予定されているのだ。故郷シチリアに帰った時に今の妻と知り合い、1年後に結婚した。妻は家庭にいるので家事は妻がとりしきっているが私も時々料理をして協力している。長女が去年の9月から小学校に通いはじめたのでずっと学校の勉強をみている。娘の成績は最高の出来であり、喜んでいる。

金細工工房 共同経営(44歳) ミラノ出身。中学卒 年収 不明
結婚22年。妻(42歳):家業従事 長女(18歳) 持家

父親の知り合いの紹介で、たまたま17歳で金細工の職工になった。中規模の会社、職人的工房、大手企業で働いた後、会社から独立しないかと提案があり、仲間と二人で工房をつくった。もとの会社から仕事は確実にくるし、他の店の仕事も受けている。このチャンスを利用しないと後は年をとるだけと思った。私の妻も仕事を手伝っている。イタリアの金細工は世界中で評価が高く上クラスの製品は景気の影響がなく仕事は沢山ある。妻とは中学が同じで、その後再会し付き合うようになり結婚した。独立してから忙しくなり二人ともストレスがあるので、リラクセスするため週末はできるだけ二人で外出を楽しんでいる

ダイエット食品販売代理店(37歳) 南部出身。師範高校卒 年収(3千3百万リラ)
結婚12年。妻(36歳):小学校教師 長男(10歳)長女(4歳) 持家

当初は小学校の教師だったが、教職に飽きたので15年で早期退職した。教師の頃から自由時間に掃除機や床磨き機等の販売の仕事もしていた。2年程その仕事に専従した後、アメリカから来たダイエット食品の営業を始めた。うまくいく限りこれを続けるつもりだ。妻とは共通の友人を通して知り合い、恋に落ちて1年半後に結婚した。彼女は両親が買ってくれた家をすでももっていたので、家の心配もなくすぐに結婚できた。妻は教師の仕事が気に入っている。午前中、私は家にいるので家事も役割分担を決めている。妻は職場の同僚との間のことまで何でも私に話したがる。とてもオープンな夫婦だと思っている。

バッテリー会社 営業担当(32才) ミラノ出身 高校卒(文系) 年収(6千万リラ)
結婚6年。妻(33歳):小学校教員(育児休職中) 長女(5歳)次女(3歳) 持家

大学生の頃、叔父の会社で半日程気儘に働いていたが、その後結婚を機に大学を中退しフルタイムで働きだし現在に至っている。営業や経営にも参画し会計もみている。様々な会社との出会いもありこの仕事が好きだ。叔父との関係もいいし、自由裁量できる分野が多く、経済的にも正しい処遇を得ている。妻は私の従姉妹の友達で知り合い、それから二人でデートするようになった。知り合って4年目で結婚した。妻は勉強好きで大学も卒業し、教員の仕事に確かな自覚を持ってやっている。私は妻が子供の小さい間、仕事を休職し自分で育てたことに満足しているが、この秋から職場に戻るのも素敵なことだと思っている。

えた。

3) 実施概要

インタビュー調査対象者と実施時期

ミラノ在住のビジネスマン
30名 (1994年4～5月)

東京在住のビジネスマン
30名 (1995年4～5月)

4) ミラノでの調査結果の概要

結果については表2にまとめた。とりわけビジネスマンが、生活各領域へ第一人称で参画していた点が印象的であった。

表2 イタリアと日本の調査結果のまとめ

仕事	●多彩な仕事モデルが共存 ●高い仕事の満足度 ●「独立」も転職も比較的自然体で	●両世代とも高い仕事への満足感 ●J世代で明確な仕事のイメージ ●S世代の関心は老後へ
家庭	●強い夫婦の一体感・パートナーシップ ●共働きベースの現実的な家庭運営 ●子供との関係は「情愛」が基盤	●家庭は子育てだけの場 ●妻が働くことは妻の勝手 ●子供への情愛と実家の繋がりを重視
余暇	●長期バカンスは人生の基本的要素 ●週末で生活のメリハリとリズムを	●遠慮がちな自由時間 ●余暇も仕事のうち
ファッション	●服装も自己表現・香水も身だしなみ ●住まいにも好みとこだわり	●自己表現は苦手 ●住まいのことは妻の領分
全般	●生活各領域へ第一人称での参画 ●常に妻をみつめ、妻と向かいあう夫	●家庭にいても「くらし」は他人事 ●気がつけば話すことのない夫婦

現在の生活全般について満足感が高い。仕事も気に入っている、家庭に満足している、余暇・自由時間も充実しているという者が多い。その理由としては、一つには、自分の体験にもとづく実感、好きなこと、嬉しいことが生活価値観の尺度となっており、世間体や横並び意識、また情報に左右されずに自身の満足感や本音をもとに人生や日常生活の様々な選択がされているためだろう。

第二に、自分の価値観にもとづいて、生活の各面に対してこうあってほしいという具体的なイメージを各自が持っているためではないか。現実ばなれした理想を追うのではなく、また将来のために今を犠牲にするというのでもなく、今日明日のより好ましい生活シーンを自分で描くことができる。

そして第三に、それぞれの生活領域に「他人事」ではなく、自分自身のこととして第一人称で参画している。義務として、あるいは無理をして家族と過ごしたり、休日にどこかに連れていく、という発想はなく、家族と共にいることを自分自身の喜び、自然な行為ととらえている。また、子供の世話や教育、家事協力など、楽しいだけでなく面倒で大変なことも、すべて妻まかせというのではなく自分のこととして引き受けている。充実した余暇、快適な生活居住空間、おしゃれ等の要求水準は高いが、それを満たすために努力もする。手抜きの方には流れていない。

次に印象に残ったのは常に妻をみつめ、妻とむかいあう夫の姿である。

結婚後何年も経過した夫婦においても、夫婦の間でのコミュニケーションの頻度と密度が濃いことが明らかとなった。家事育児などのパートナーシップに始まり、家庭運営の相談、仕事上の事柄、休暇の計画、互いのおしゃれや身だしなみに対する意見や感想、社会問題や生活の細部にまでわたる意見交換が日常的に行われている。このことは結婚年数や年齢による差はあまりみられない。こうした夫の妻との関係が継続している根底には、妻は夫へ、夫は妻へ、相手に対する強い興味や関心があり、それを互いに、枯らさず、日常的に育て耕していつて

いるためではないだろうか。

夫から妻に対しては、話題が豊かで自己発信力のある女性、感性の磨かれた女性、ファッションに気を使い常に美しく身だしなみを整える女性であることを求める。要求するだけでなく、夫の側も妻と常に対話をし、妻を見つめ、妻に変化や新しい発見があるとそれを率直に表現し、おしゃれが似合っているならば素晴らしいと口に出してほめる。また、困っていると手を貸す。夫の側から自分を見つめる視線や反応、そして心遣いがあるからこそ、妻も張り合いが出て自分を磨き、夫の期待にこたえようとするのだろう。妻にとっても夫との対話は楽しいものとなるのだろう。こうした相互関係とフィードバックが、毎日のように、行われているからこそ、結婚後10年たっても20年たっても豊かなコミュニケーションと新鮮な対話が存在するのでないだろうか。

3、調査結果の考察

この2年間、ミラノと東京の差が何に由来し、そして今後私たちが新しいが困難な選択を行なう時に障害になる本質的な事項は何なのかをずっと考えてきた。たったこれだけの調査でそのような大きなテーマに挑むのは冒険であるとも思えたが、「行けるところまで行ってみる」ということであり、「試み」であることをお断りする。

1) 場所の意味；背景(backland) は添え物ではない

ミラノに限らずヨーロッパでは都市の景観がよく手入れされ、インテリアも充実している。そのことの端的な違いがインタビューの場所にあらわれる。ミラノではオフィスや家庭で行なったが、彼らは机の上の小物や自分の家族やインテリアを自分を表現する要素としてなくてはならないと考えている。

それに反して東京では喫茶店や会社の共用の応接室で行なった。それは東京の住宅事情によるからと最初は気にしていなかった。だが、よく考えてみると、逆に東京では男性は自分を表現するのに机の上の小物や家族を必要としないのではないかと考えるようになったのである。そうだとすれば東京で職住近接が実現しないのは、彼らがそれを自己のアイデンティティにかかわる重要な要素だとは考えていないからとも思えてくるのである。彼らが自己のアイデンティティを自己の中で完結できると考えているとしたら、職住の関係は単に便利か不便かという問題でしかない。

ではそのような自己アイデンティティの差は何をもたらすのだろうか。下の図はインタビューの時の写真である。東京の方は喫茶店での写真であるから背景は彼らに属していない。ということで白く抜いた。ミラノでの写真の背景は彼自慢のオフィスである。後ろの絵画から並んでいる書籍まで彼の趣味と構想で選びぬかれた物である。つまり彼の一部分なのである。

比べると一目瞭然である。ミラノ男性のなんと威風堂々としていることか。比べて東京の男性のなんと頼りなげで、弱々しいこと。

近代国家の支配のツールの一つは人々を生まれた土地から切り離すことであった。土地に帰属する農民は保守



図1

的で頑迷で外からは支配しにくい存在である。言葉は少なくとも強い自我を持っていた。彼らを土地から離し、均質集団に入れ、さらに貸与品で囲み、定住させないことは自我を萎えさせるには効果的な方法であった。それは敵によって行なわれたならば、人々はこのような生活様式を疑ったに違いない。だが、それは天皇陛下の名前で「必要」という大義のもとに実施されたのである。

そして戦後わたしたちはアメリカ文化を享受しながらも、背景を必須とする自己表現を学んできただろうか。都市文明と農村文明の決定的な違いが背景観の違いにあることを注意深く学んできただろうか。

クリントン大統領と橋本首相の記者会見の写真をみれば背景重視はミラノの特徴ではなく、西洋に普遍的な価値であり、アメリカも例外ではないことがわかる。だがなぜ私たちはこの基本的な様式を学ばなかったのか。それが日本文化のアイデンティティを守るのに必須だと考えたからだろうか。

そうではない。

私たちは背景と自己が一体不離であるという哲学を大衆化していなかったのである。

鎌倉仏教の「全は一」から見れば、背景と自己は一体不離である。そして日本の支配階級にはそのような背景重視があったことは細川首相がなによりも首相官邸をリニューアルし、記者会見の場所にもこだわったことからうかがえる。だが、現在の政治でも経済でも主流を占める人々には全く欠落してしまったのである。だから細川さんは「無駄使い」などと悪口をいわれたのである。

集団就職から始まり、大学進学とは都市への人口流入であった。高度経済成長とは日本経済の農業ばなれであった。だが、それが都市文化の創生とはならず企業の集団主義の創生で終わったことの理由をもう一度ふかく考えてみたい。

2) 「文脈」を重視する／しない

俳句は江戸町人の文化であり今も日本人に支持されている。俳人でもあり研究者でもある復本一郎氏は「おかしみ」とならんで重要な要素が「かるみ」であるという。そして現在の俳句世界からこの概念が失われていることを憂うのである。(笑いと謎；角川選書 1984)

そして俳句研究がおちいつている要素還元的な、つまり古い日本の言葉でいえば「重箱のすみをつつく」式の思考パターンを問題視する。

たとえば芭蕉の有名な句

「住む方は人に譲り、杉風が別所に移るに

草の戸も住替わる代ぞひなの家」

復本一郎氏はこの「奥のほそ道」冒頭の解釈を巡り、現在の通説はこの句が最初に実態的に詠まれた場面ごとさらにはほじくり出して、その些末な知識の断片を絶対化する解釈であると断じている。通説の根拠は金箔を散らした豪華で華やかな短冊に記された句文によっている。

「むすめ持たる人に草庵をゆつりて

草の戸もすみかわるよや 雛の家 ばせを」

芭蕉が自分の住处である草の戸をパトロンで娘がいる杉風に譲った時に詠んだ事は事実であり、そうであれば「草の戸=雛の家=杉風の新しい別宅」である。つまり芭蕉の家であった草の戸のような寂しい粗末な家が杉風という娘のある大金持ちの持ち物になって華やかにあでやかになったことを詠んでいると学会の主流派は解釈していると言う。だから詠まれているのは同じ一軒の家である。

だが、と復本一郎氏はいう。最初に詠まれたのはあくまで「ケ」の文脈にあるもので、「奥のほそ道」の冒頭の句は、まさにここに位置づけた芭蕉の意図をもとに、すなわち「ハレ」の文脈にあるものとしての解釈を成り立たせるべきであると。すなわち芭蕉がもっとも恩義を感じているパトロンである杉風の別宅から奥の細道への旅を始めた事を世間に知らしめる事を意図していたとする。そうならば「草の戸=芭蕉の住处、雛の家=杉風の別宅」となる。つまりここでは二軒の家が詠まれていることになる。

この議論は狭い俳句の世界の事件ではなく、私たちが毎日行っている議論や判断とも通底する重要な問題を提起する。

復本氏と主流派をたがえたものは古道具屋から発見された「金箔を散らした豪華で華やかな短冊」である。こ

れによって「奥のほそ道」は、書かれたように「素直に読める書物」から「考証抜きには読めない特殊な書物」になったのである。根拠は「短冊が贗物ではなく、真正である」ことからのみ来るのである。

復本氏によれば「奥のほそ道」の冒頭の句の解釈は二通りあってきたが、それまでは真正の短冊が存在せず、両論併記だったのが「真正な、つまり豪華な短冊」が見つかった途端に「考証」派が優勢になったそうである。

これは言語学者鈴木孝夫氏が力説していた「論より証拠の日本」「証拠より論の西欧、イスラム、インド、中国」の典型的な例である。

証拠とは物である。そして論とは文脈である。「論より証拠」ということは「目の前にある物」が「状況や前後の脈絡などの論」から切り離されて、いやそれにも優先して価値や意味を持つということである。

だから日本人ではビジネスマンは自分が頑張れば、状況や前後の脈絡、つまり理念や達成可能性に関係なく自分の行動や存在が価値を持つと考えやすいのである。もちろんそんなことはありえないことも本能的にわかっているから、会社はつぶれては困るし、家庭も形をたもっていなければならない。それゆえ終身雇用が会社の、子育てが家庭の手段ではなく、目的になってしまうのである。

3) この国のカタチ；「論より証拠」

私たちは何故「証拠」を信じるのだろうか。それは認識ということについて初歩的な訓練すら受けていないからである。それはもちろん昔だって僧侶のような有閑階級しか論じられなかったし、日本ではそれは家長や武士の仕事であって、普通の人はそのような上の人のかだした結論に従うことだけを求められてきた。むしろ「認識」などを一般の人が考えること自体「下手の考え、休むに似たり」で排除されてきたのである。

それでも江戸時代は武士には体系的な教育が藩校などで、江戸や大阪の町人は寺小屋などで必要な人や、関心のある人達は学べるようになっていた。だが農村では寺小屋も普及していず、認識に関する成熟はほとんどなかったはずである。それが戦後の教育の混乱とあいまってむしろ大学教育からも認識についての基本的な訓練が欠落してしまったのではないだろうか。

その掃蕩が96年の「O-157事件」の後始末で厚生大臣がテレビの前でカイワレ大根を頬張って、一応の幕を引いた事件である。

論がないのである。

ミドリ十字経営陣の土下座謝罪も「論より証拠」のこの国のカタチをよくよく国民の前に見せてくれた。情報公開が叫ばれる。だが情報とは論であり、それは証拠に優先するという価値観が育たない限り、それは公務員の出張旅費の不正使用の証拠探して終わるだろう。

4) 論とは何か

論とは「目の前にないもの」で、証拠とは「目の前にある物」である。なぜ日本以外の人々は技術者でも科学者でも「目の前にないもの」を信じることができるのだろうか。

それは「目の前には何も無い」と思っているからである。

それを禅宗では「色即是空」という。これは古代インドのパラモンが到達した認識として知られている。これは、昔の貧しく労働に明け暮れた人々には到底理解できない原理であった。ごく一部の特権階級だけが到達できた認識である。しかし現在の最新脳科学は、この認識がきわめて合理的であることを証明した。

私たちが見ていると思っているものは実はアニメーションの絵のように一秒間に何枚もの図像情報として脳に取り込まれているものに過ぎない。だから「茶碗があるな」とか「おや、いい男がいるな」という判断は、単なる判断に過ぎない。脳にとって確かなのは、絶えず視覚情報が送り込まれていること、それを経験にたして脳として「今までに知っている何か／知らない何か」という判断をしているだけのことである。

日常生活においては、こんなことはドウデモいいことである。だが世界を掌握するためにはゆるがせにできないことなのである。例えば、目の前にある黄色い板があなたが後ろを振り向いている少しの時間に、赤い板に変わったでしょう。あなたはこの現象をどう判断するだろうか。

選択肢は二つある。

- ・表が黄色、裏が赤い板である。(空間認識)
- ・表も裏も黄色い板が、赤く変ってしまった(時間認識)

私たちは、どこまでいっても厳密にはこれを識別できない。そのことを骨身にしみて理解した時、「論より証拠」は愚かな判断として退けられるのである。あなたが古代の王で、全民衆の未来に責任をもたなければならないとしたらこの結論は余りに非情である。あなたが戦国の武将で隣国に負けることができないと考えていたら、これは大変なことである。

だが目の前に在るものを最早信じることはできない。なぜならば、それは過去の自分の経験からの判断でしかないのである。判断を間違わないためには、他の多くの条件と照して自分の「目の前にある」という判断を検証せずにはいられないのである。判断は仮説でしかない。だから大事なものは検証でありつまり「論」となるのである。これは仏教でもイスラム教でもキリスト教でも同じである。この原理を外した為政者が権力を保持することはできない。よしんば権力を保っても、世界が破綻してしまえばそれまでなのである(北朝鮮のように)。それは神の掟、あるいは仏典として書かれてきた。だがそれは宗教であると同時に理であったのである。

だから民主主義の世であれば、一人一人の国民がこのような危機感を持つことが要求される。教育はそのような危機感を合理的に生きる知的な鍛練を与えることでなければならない。だが現在ほとんど手はつけられていない。

5) 個人主義とはなにか

昨年あたりから「個人主義」や「個」が叫ばれるが、その前に「個の価値認識」を世界標準にする必要があるのである。つまり自分と背景が一体不離であることを知らなければ世界標準にならないのである。そうなれば自分の生活のためには会社の存続が必要で、自分の人生が価値を持つためには会社の理念がしっかりしていなくてはならないことが良くわかるであろう。会社のために尽くすことが人間として価値を持つのではなく、会社の理念を見失わないためには自分が理念をしっかりもたなければならないのである。会社と自分が一体化するとは本来はそういうことであつたはずだ。

鎌倉仏教、すなわち禅宗はそれを「全は一」という言葉で顕す、と同時に隠蔽した。何故ならばこの認識に達した武将ほど強い存在はないからである。

97年のNHKの「日曜大河ドラマ；毛利元就」は「マイホームパパの物語」でおわっている。だが彼は「全は一」という哲学の実践者なのである。彼は家族がなければ武将はない。他がなければ自もない(三本の矢)。民がなければ武士もないことを、当時の誰よりも、知っていたのである。だからばやくしかなかったのである。たった一人で、意思決定のたびに、たった一人で実世界の全体像を作り上げるしかなかったのであり、それには一人で対話をするしかなかったのである。

そのような全的な認識こそが彼を多くの勝利に導いたのである。

単なるマイホームパパだったのは尼子父の方である。だから彼は求められてもいないのに息子を偉大な武将に押し上げようとしたのである。だから息子は桃太郎になるしかなかったのである。小さいときは褒美で立ち上がることを要求し、自分で立ち上がりたいたときは、抱きおこしてしまったのである。鬼が島に行けない桃太郎は家庭内暴力になるしかないのである。

尼子父の過ちは、家族があつて自分があるとは考えずに、自分があるから息子があるとだけ思い込んだことなのである。(現在の日本のサラリーマンやその妻の多くが自分が家族を支えていると思ひ込んでいるように)

すなわち彼は「全は一」の原理を逸脱したのである。だから尼子氏は滅びた。自滅したのである。それは毛利氏にとっての勝利であつた。

当時の武士集団の中で「全は一」を規範化しえて、しかもその認識に忠実に家臣を統率できる知謀に優れた大将をいだいていれば、それは一族にとって子々孫々までの繁栄の約束であつた。だからそれは秘義として隠されたはずである。だが同時に子々孫々にだけは正しく伝えねばならない奥義でもあつたはずである。

あるいは戦国時代にはまだ「全は一」というような規範にはなっていない、江戸期に戦国武将の評価をあつめて規範化されたのかもしれない。

民主主義の世の中になっても、いやどのような社会になっても「全は一」が認識の究極で在り続けることには変りない。これを逸脱すれば権力は腐敗し、民主政治は衆愚政治に墮する。

6) 認識の原理とは何か

すでに述べたように第一は「色即是空」である。私たちは厳密には時間と空間を識別できない。あるいは時間と空間は分割できないということである。すなわち時間と空間は一体不離である。このことを認識することが仏教の根本である。

そんなこと、当たり前だと思ふかも知れません。でももう一度あの黄色の板と赤い板のことを思い出して下さい。黄色が赤く変わった時に、私たちはどちらかの事象だと判断してしまうのである。そして一度その判断に傾くと、その判断から抜け出すのは至難なのである。

だが現実と違う判断をした権力者は権力を失う。武将は戦に負けるのである。

人間が一度思い込むとそれから抜けるのが、どんなに大変なことかを判りやすく説いたのが1930年のBORINGの「若い女か老婆か」の図です。(図2)

この図は日本では「顕す／隠す」の解題にもっぱら使われ、スノッな大学アカデミズムの専有物になっています。でもこれは信仰、あるいは神と偶像の関係を議論しているのです。この絵は実は三つの認知に関する法則を説明します。

- ・「若い女」も「老婆」もともに存在する
(客観とは外界に存在するものの記述である)
- ・「若い女」と「老婆」を同時に見ることはできない
(only oneは認知のメカニズム；若い女が顕れば老婆は隠れる；顕す／隠す)
- ・「若い女」も「老婆」もインクの染みでしかないかもしれない
(意味は身体の内側から来る；発展して現在のaffordance理論になる)



図2

つまり脳の情報処理系のメカニズムはonly oneを探すようにできている。だが、その得られた結論は脳の情報系の結論であって、それが客観的に正しいということとは別だということです。

多くの人が当時台頭してきたヒットラー（外にあるonly one）を目的化して各自の脳を活性化(覚醒) するとしても、それが正しいということにはならないという事を認知科学から追求したのです。つまり真理の相対化を図でわかりやすく示したのです。

ですからこの図をみれば、科学的客観や確信とか信念が絶対的真理などではありえないことが容易に了解できるのです。しかし、それはキリスト教の神についても同じことを結論づけます。だから慎重に慎重にヨーロッパの知識人はこの問題を議論したのです。

しかし、モーゼの十戒の1~3はこの問題をすでに当時のイスラエル人が議論していたことを示唆します。神は敬わなければならない。だが、神を直接さし示すことはできないのです。だから偶像崇拝をしてはならないと二番目に強く規定するのです。神は「～ではない」という否定型でしか表現できない、これは大変な文化大革命だったはずです。

さらに三番目で「神の名をみだりに口にしてはいない」と駄目押しをしています。この三つの規範は個々には日本でもよく知られています。しかし、ばらばらでは無効なことは知られていません。3点セット、つまり規範の体系であることが重要なのです。

そしてセットであればこそ、この三つから、神の前の個人の平等が絶対規範として次に導かれるのです。何故

ならば「神」は「不成文字」であり、神の名のもとに語る人間が見ているのは実は「若い女ではなく老婆かもしれない」ことは「神」しか判断できないということになるからです。それゆえに各人は平等に、各自が見ているものが「若い女であって、老婆ではない」ことを主張する正当性（権利と義務）が保障されるのです。

日本での天皇制についての議論で抜けているのが、戦前は「天皇陛下万歳」といってみだりに天皇の名を口にしたことや、「統帥権」という偶像を刻んで、それをおしだいた人々の独裁をゆるしたことをくり返さない反省と決意です。

われわれが肝に銘じなければいけないのは、物理的にアメリカによってこの国が蹂躪された1945年よりはるか以前に、偶像崇拜と、みだりに神の名を口にする事で、天皇制というbelief systemを自らの無知と臆病によって空洞化させていたということです。そして大切なのは、そのような愚かな出来事は70年前の日本だけのことではなく、すべての帝国の盛衰の歴史でもあることを知って、自虐の総懺悔から抜けだすことです。

7) 日本特殊論とは何か

次の例題をやってみましょう。

次の二つの映画のうちどちらを見たいですか？

○地上最大の作戦

●歴史上もっとも長い一日 (THE LONGEST DAY)

答えは、日本人は○の映画を見たいと思うし、西洋人は●の映画を見たいということです。

この例から言えるのは「色即是空」が如何に困難かということです。認知において自由であるとは、どちらの題名からも同じ内容を想起できることです。これがむずかしい。つまりお嬢さんと老婆を同時に見るのは普通は困難だということです。それは私たちが2000年以上空間から事物を記述してきたし、西洋では5000年以上時間から事物を記述してきたからです。

ただし大事なことは、ここまでは西洋と日本は相補的だということです。だから日本の文化が優れているのも劣っているのでもないということです。

よく日本人は関係性を大事にする繊細ですばらしい文化だとか言います。だけど「空間／トポス」から記述するから関係性をはっきり文字に残り、身体はよく見えます。その代わりに運動や主体が隠れるのです。

反対に西洋では時間から記述しますから関係性は隠れますけど運動はいきいきと描けます。したがって主体がよく見える。だけど身体が隠れる。それで関係性の方を遠近法とか対話力とかの、別にinformation化されたコンバーターで補うシステムになっている。あるいは断食／拒食などして自分の身体を極限におくことで言葉の身体性を獲得する努力が伝説化してきているのです（幾多の聖人やS・ヴェイユ）。

どっちみち時間と空間の両方を同時には文字化できないのです。よくいわれる不成文字だからではなく、人間の中にある認知のメカニズムによっています。

日本では禅宗は支配階級のものに止まって、大衆に広がりませんでした。大衆仏教はこの認知の問題を軽く扱いました。だから日本の大衆はついにこの根本原理にふれることなく明治維新を迎えます。

むしろ芭蕉の運動の方が皆で考える場として実質的な働きをしていたと思います。事実西洋では俳句を西洋にない認知の形式として高く評価しています。江戸の町人文化はこの認識の原理を獲得していました。「全は一」という空間記述を「不易流行」という時間記述におきかえたのが芭蕉です。しかし明治以降体系的にこの認知の根本原理を大衆化することはなかったのです。

そこが西洋と日本の決定的違いだと思います。もともと中世ヨーロッパでは正統と異端の論争を通じて市民階級、上層農民でもこの認識の原理を獲得していました。その上に第二次世界大戦後のアメリカでは、認知科学の発達に支えられて大衆レベルにまで、少なくとも哲学の専門コースでなくても、芸術や自然科学の専攻生にもこの認識の根本原理をわかりやすく教えていったのです。

8) なぜ? ミラノの男性は生活の各領域へ第一人称で参画し、東京の男性は家庭にいても暮らしは他人事なのか。

●時空認識が主体を顕す/隠す

もう一度、さっきの映画の題名を眺めてみましょう。

「地上最大の作戦」では作戦全体が浮かぶ。それで一人一人の戦士(個人/主体)は隠れる。もちろん実際の大将は見えているし、見えていなければ作戦上の大失敗をするはずだ。だが主役は作戦なのである。勝利しなければならぬが表。それが一人一人の兵士にとって意義あることは裏に隠れるのである。

「歴史上もっとも長い一日」では兵士の一人一人が浮かぶ。作戦の目的や全体は隠れる。もちろん全体の構想はあるし、なければ負ける。だが主役は参加した一人一人である。彼らにとって困難で意義のある一日、戦いが表で、作戦の目的は裏に隠れるのである。

ですから西洋と日本を比較する時に、そのことをきちんと押さえておかなければなりません。戦さに西洋も日本もあるはずありません。限られた資源を有効に使って、地形や天候などを自分に有利に引きつけた方が勝つのです。兵士一人一人が現実には戦う方法も変りはないはずですが、それでも作戦を表現する言葉はこれほどに違ってしまいます。個人あるいは主体という「一」と全体や目的である「全」のどちらを「表」とするかということです。

ですから第一の結論は、ミラノと東京の男性の生活は同じかもしれない、ということになります。それは時間記述言語と空間記述言語の差でしかないかもしれないということです。どちらを表とするか裏とするかだけの問題かもしれません。つまり言葉と認識の違いです。

●量の違いは質の違いか

一方向にやはり違うという感覚もあります。それはお喋りの量と、関心の幅が違います。でもそういう人は東京にもいました。数人の元気なS世代で、子育てに相当のめり込んできたと思われる父親たちは、そういうことを公然と口にできない時代に「仕事は男の生きがいになれない」と考えて生活を設計した人たちです。仕事は男の義務であっても、生きがいではない。いやそもそも生きがいを仕事や家庭によってまかなってもらおうとはしなかったいさぎよい人達だったように思います。共通しているのは自分の趣味や関心がはっきりしており、子育てとは子どもの自立を助ける事だという割り切りがあることです。そして自分は子どもを助けられるという自己肯定があるのです。そしてそういう人はまたいろいろなことに関心をもっているのです。社会一般の話をしていても楽しいし、話をしているとこちらも元気になるのでした。もちろん衣服や日用品の買物の話をしていても具体的な反応が返ってくるのです。

転職経験をきいても今回のお会いした方たちは、結構転職してきて現在は自分の納得のいく仕事を得ている人が多かったです。

そういうことをマスメディアは隠してきています。多くの記事は、いい大学をでて安定した会社にいるビジネスマンの目線で書かれています。最近になって、誰かが銀行が潰れると大騒ぎするのはおかしいといっていました。銀行員の数はそれほど多くはないし、いい大学をでている人は少ないのです。大多数の人にとっては他人事なはずですが、でも新聞を漫然と見ていると大変だと思ってしまう。

しかし大企業がよりどころにしてきた価値観に背を向けてきた人達の方が圧倒的に多いのです。そういう人はミラノのビジネスマンに似ていました。大企業から離れたところで、大多数の人たちは試行錯誤を繰り返しながら自己肯定できるようになっているのです。

ところがそういう方も妻との関係については考えあぐねている様子でした。子どもを育て終わって、これからの家庭が夫と妻が向合う場になる事を予感しているのですが、妻の方が友人関係のなかで、夫と妻が棲み分けている一般家庭をモデルにして、夫の気持ちに気がついていない様子なのです。

これが第二の結論。第一人称でかたる大勢の人の言説がメディアから排除されているのです。だから彼らを少数だと錯覚するのです。目線の違いです。

●事実と意味づけ

ミラノと東京で共通しているのは世代の変化です。カジュアル化、アメリカ化、少子化、晩婚化、男性の家事育児への参画。同じです。

ところがミラノでは80年代から社会学で「カンガルー家族」の研究が始まり、30歳過ぎても親元から離れない子どものいる家族の追跡を積み上げてきている。それをもとに社会制度をどう変えるかとか、変えなくていい、などいろいろ議論がされてきている。日本でも「一卵性母娘」は注目されてきたがマーケティングのターゲットに止まってきた。昨年社会学の山田昌弘氏がレポートをまとめたところ「娘がリッチで楽しんでいるのでケシカラン。だから晩婚化なのだ。問題だ。」という「説教」になっていたのです（日経新聞）。

同じことでも、知的関心からアプローチするのか、説教のネタとしてアプローチするのかで違ってしまいます。だからミラノには「カンガルー家族のようなおもしろいこと」がたくさんあり、東京では他人事のような分析と「問題」があふれかえるということになりかねません。知的関心のもち方の違いです。

4、最後に

1997年の主役は風説であった。牛殺しで明け、世界を半周して、鶏100万羽の処分が終わったのである。日本はその前年にカイワレ業者に壊滅的なダメージを与えている。昨年はダイオキシン騒動で子どもたちは焚き火の中止に追込まれた（読売 97/12/3）。カルフォルニアでは紙巻きタバコが公共の場から追放された。

風説はそれを他人よりも早く知っている人がいれば、その人はそのことで大もうけをできるのである。さらに、もしも仕掛けることができればもっと大もうけが可能である。

というような感覚をほとんどの日本人は失って久しい。

神戸の少年の事件でもいたずらに騒ぎたて、それを口実に日頃の鬱憤をはらすことを目的としているものが多かった。だが村上龍氏は「何故犯行はなされたか」という、つまり「こころ」の問題として扱うことを諫めた。理由として「子どもが迷子になるのに理由はいらないから」とした。その上で、「なぜ、彼を止められなかったのか」というふうに問をたてることを提案している。つまり事件を中にいる犯人と関連づけるのではなく、「事件の外」にある家庭や学校やカンセラーと関連づけることをである。

日本のメディアは事件を「事件の外」と関連づけることを極度に避ける。それが年末の「ポケモン騒動」ではっきり露呈した。「テレビ東京」は200人以上の子どもが救急車で運ばれた事象に対して「全く考えられない」とのコメントを繰り返すばかりであった。そして新聞は「光過敏症」なる病気の素因を大きな活字で報道するのであった。つまり「事件の中」にいる被害者と関連づけただけで思考停止をしたのである。

だが700人以上に被害届がふくれ上がったのをみて、さすがにNHKが、夏前に教育番組のアニメで同じ症状が出ていたことを「告白」し、さらにイギリスでは三年以上前から「情報化」され「ガイドライン」が業界で確立していたことを明らかにした。

その後、「テレビ東京」はもちろんのこと他のメディアでも「数百人の子どもを緊急に病院に運ばせる、つまり大量傷害事件」の犯人、つまり事前に危機を予見できる立場にいた人間の責任を追及し明らかにする動きは一切なかった。そして「ポケモン」のテレビ放送を無期限に延期した。だが、イギリスのガイドラインにそえば現在のフィルムを適性化することは技術的には容易なはずである。

その結果、子どもたちはポケモン放送も焚き火も取り上げられたお正月を迎えたのである。香港の子どもたちが鶏料理を取り上げられたように。

何故か。

それは私たちが事物の本質は中を探せばみつかると思っているからなのである。だから背景がなくても自分は存在できると考えてしまうのである。それが図1である。「目の前に見えているもの」が、実は過去の自分の体験の記憶でしかないことを知らないからである。

(1998年1月9日)